演劇×自分史

カスガイ創造プロジェクト

誰にでも“しこり”のように残っている記憶がある。そんな思い出やエピソードを、“演劇”というツールを使って他者と共有することで、思いがけず、心が整理されたり、気持ちが軽くなったり。多くの記憶をみんなで一緒に体験していると、人々の記憶が混ざり合って、何が本当で嘘なのか、煙にまかれてしまうことも。そう、“自分史”は自分以外、誰にも答え合わせができないもの。

かすがい市民文化財団

2016-2019

演劇×自分史
カスガイ創造プロジェクト

自ら歩んできた人生 を綴る“自分史”。文章を書く印象が強く、ためらう方も多い自分史ですが、かすがい市民文化財 団は、市民とともに一人ひとりのかけがえのない人生を共有し、明日への希望につなげることを模索 しています。その一つとしてスタートしたのが“演劇×自分史”です。

撮影・浅田政志

1 自分史×春日井市

自分史とは、歴史家の色川大吉氏が「無名の庶民、無名の個人が、昭和という歴史の中でどのように生きてきたか」という趣旨でまとめた『ある昭和史ー自分史の試み』(1975年刊)で体系化された用語です。自叙伝とは異なり“一般市民”に焦点をあてたことで、世間に知られるようになりました。

1999年、春日井市は新しい文化施設をオープンするにあたって、「市民が主体となった文化芸術活動」を推進しようと、自治体として初の「日本自分史センター」を開設。かすがい市民文化財団が運営する当センターには、全国から約8,000冊の自分史が集まり、無料で閲覧・貸出を行っています。また、自分史相談や文章講座、サークル活動支援、掌編自分史全国公募などの事業を展開しています。

日本自分史センター

文化フォーラム春日井2階にある、自分史専門のこぢんまりとした施設。無料の自分史相談も行っています。

掌編自分史 全国公募

毎年異なるテーマで短編の自分史を全国から募集しています。優秀作品を掲載した作品集も毎年刊行。

2 自分史から生まれる創作劇

「今まで誰にも話せなかったのに、思わず話したくなる」という人柄が定評の、北九州を拠点に活動する俳優・演出家の有門正太郎さんを中心に、2017年度からスタートした、演劇×自分史。参加者は10代から70代までと幅広く、演劇に興味がある人、自分史サークルに所属している人、新しいことに挑戦したい人など、志望動機は多様です。

ワークショップでは、「他人が経験したことがないと思うものを教えてください」と参加者の人生を聞き取ったり、そのエピソードを別の参加者が演じてみたり。人生経験豊富な年配の方も多く、笑いの中にも寂しさや憤りなど、様々なものが見え隠れし、感極まって涙する人も。大切な記憶を互いに昇華することで、気持ちが楽になるのかもしれません。

ありかど しょうたろう
有門正太郎
俳優・演出家

全国各地の劇場で、地域と演劇を結ぶワークショップのファシリテーターとして活躍。

地元アーティストもプロジェクトに参加

服部哲郎 振付家

岡本理沙 俳優

3 演劇×自分史のこれから

演劇はその多様性から、自己表現力、創造性、コミュニケーション力を高める可能性があると言われています。地縁・血縁などの利害関係に縛られることなく、知縁で集まり、一つのものを作り上げていく。だからこそ、普段感じることのできない心の振り幅に、自身が、そして他者が気付けるのかもしれません。一方で、自分史はその性格上、プライバシーへ介入していくことがあります。同時に、正解もなく、答えもないという不確実性をはらみます。

そんな演劇と自分史、それぞれが持つ余白を混ぜることで、演じる側も観る側も自由に想像ができる。「答えはない、だから楽しい」を合言葉に、演劇×自分史プロジェクトを模索しています。

演劇×自分史 公演 第2弾『旅旅(ふたたび)』

PUTTBI

人生の旅を、ふたたび体験

2019年2月10日、演劇×自分史公演 第2弾『旅旅(ふたたび)』が文化フォーラム春日井・視聴覚ホールで2ステージ上演されました。きちんとした作品を上演したいと、あえて500円の入場料を設けたチケットは、追加席分も前売完売。公募で集まった10代から70代の19人の市民参加者は、4か月間のワークショップの集大成を披露しました。

俳優・演出家の有門正太郎さんが名付けた『旅旅』というタイトルは、参加者たちの“旅”にまつわる物語であること、過去を旅するように追体験すること、2年目の公演であること、という意味が込められています。

有門さんは、19人から聞き取ったエピソード(＝自分史)を元に、プロットを書き下しました。修学旅行の当日、母に手を引かれ町を出たある参加者の話を軸に、出演者たちは様々な実体験を重層的に織り込んだ「演劇」を、自分自身または一緒に創作してきた仲間(＝他者)と共に70分演じました。

実話とフィクションの境界が曖昧で、様々な物語を想起させる「演劇×自分史」。観客からは「これまで自分史に興味はなかったけど、人生を振り返りたくなった」「セリフではなく、自分の言葉で喋っている感じで胸を打たれた」「昨年以上に、一人ひとりがイキイキしていた」「他人事なのに自分事のように感じた」等の声が上がり、1年目以上に大きな反響を呼ぶ公演となりました。

演劇×自分史 公演ができあがるまで

PROCESS

10月 → **11月** → **12月** → **1月** → **2月**

- 10月：「他の人が経験してないこと」「青春時代の話」「思い出の場所」等のエピソードが縦横無尽に語られる。 — 2days
- 11月：心の動きを大切にするワークショップ、エピソードを元にした無言劇等にもトライしてみる。 — 2days
- 12月：公演タイトル決定。有門さんと矢継ぎ早のQ&Aを繰り返し、その場でシーンを演じ始める。 — 4days
- 1月：情景のみ記載された台詞のない脚本完成。有門さんからの鋭い指摘が入り、悪戦苦闘が始まる。 — 6days
- 2月：「ありのままのみなさんを魅せたい」と参加者に伝える、有門さん。本番まで全員で走り抜く。 — 3days

参加者

「老人にみられない努力を。」
(村井一氏さん)

「演劇×自分史」には、1年目も参加しました。2年目は有料公演になったので、演技経験のない自分が参加していいのかな、って辞退しようかと思ったくらいです。でも、1回で辞めてしまうのはなんだか惜しい気がして。覚えも悪いので、稽古中は不安なこともありましたが、孫の年齢にあたる若い人たちと交流して、一緒に作品を作り上げていくことが本当に楽しかったですね。でも、自分が演技している映像を観たら、動きが鈍くて、つくづく年齢を感じました(笑)。これからも若い人たちと、新しいことに挑戦していきたいので、胸を張って過ごしていきます。

参加者

「歌が私にとっての自分史。」
(山田咲野さん)

大学の専攻は声楽でした。卒業後も音楽を続ける人もいる中で、私は一般企業に就職して、音楽とは関わりのない人生を送るのだと、自分の才能に見切りをつけていたんです。「演劇×自分史」は、卒業前で時間もあったので、気軽な気持ちで応募しました。まさか自分が歌う場面をもらうなんて、想像もしていませんでしたね。でも公演後に、全然知らないお客様から「すごく良かったよ！」って声をかけてもらったときに、これからも絶対に歌を続けていきたいと思いました。仕事と両立するのは大変だろうけど、何が何でも歌の道にしがみついていきます！

公演来場者の声 VOICE

1 出演者の楽しそうな雰囲気がとても印象的！(40代・会社員)

「人生は物語である」と改めて感じました。演劇×自分史の公演を観て、人生の途中である私の物語は、演劇になるとどうなるのだろうと、考えてしまいました。

2 昨年よりも成長している出演者たちに感動！(匿名)

昨年、車いすで出演していた方が、今年は歩いて演技をしている姿を観て驚きました！過去の自分より向上できるように、私も何か新しいことを始めてみようと思います。

演劇×自分史
公演 第2弾
『旅旅(ふたたび)』
ダイジェスト映像

2018.10.11 — 2019.2.10

人生という舞台を生きる

演劇×自分史 SUGOROKU START!

2016

演劇を通して、地域の人々と心を通わせたい

鑑賞事業としての演劇ではなく、“共感する力を得るもの”としての演劇を春日井で作れないかなぁ。モヤモヤと悩む文化財団。

リージョナルシアター事業へ参加

演出家や俳優を公共ホールに派遣し、演劇の手法を使ったワークショップ等を実施する一般財団法人地域創造の事業に応募、実施決定。

俳優・演出家の有門正太郎さんが北九州からやってくる

リサーチで、春日井市内をウロウロ。文化フォーラム春日井の下見で、日本自分史センターを発見。「うわ〜！自分史って！超面白いじゃん！」と前のめり。

自分史のモヤモヤ

コア層の高齢者だけでなく、もっと多くの世代に関わってもらうには？ハードルの高い「書く」以外のアプローチは？モヤモヤ悩む文化財団。

リージョナルシアター事業の実施

文化フォーラム春日井と市民会館で、民話や地元の写真を素材にしたワークショップを実施。終了後のフィードバックで、演劇が持つ豊かな価値観や意味の多様性について有門さん、地域創造、文化財団で意見交換。モヤモヤ会議が続く。

2017

「演劇×自分史」混ぜてみよう！

「芝居がかった台詞を言う」のが演劇ではなく、「名を成した人の自叙伝、自慢話」が自分史ではない。「他者を演じることで、共感する力を得る」演劇と、「市井の人が来し方を振り返り綴る」自分史は、「今をどう生きるか」が核心となる。その2つを混ぜたら、どんな化学反応が…？春日井ならではの演劇創作、新たな自分史の在り方を模索するため「演劇×自分史」を事業化することに！

2018

演劇×自分史のベース作り

WORK.1 自分史センター 相談員への相談&取材

\ 自分史の魅力って？ /

1. 暮らしへ目線を向けることで、小さなことにも敏感に気付くようになる。
2. 書くことで記憶や思い出が蘇り、豊かな気持ちになれる。
3. 書いて一区切りつけると、新しく生きるパワーが生まれる。
4. 目的を同じとする仲間を得ることで、新しい人間関係を築ける。
5. 語る者のいなくなった時代を雄弁に語る、頼もしい存在。

WORK.2 地元アーティストたちと考える会

公共ホールと一緒に仕事をすることの意味、自身の作家活動と地域との結びつきを考える時間を作る。

WORK.3 「どこでも アート・ドア」でアーティストが教育現場へ

演劇に触れたことのない若い世代へのアプローチ。多様な生徒にリーチできるよう、異なる属性のアーティストたちと教育現場に出向きワークショップを行う。

どこでも アート・ドア
市内の学校や福祉施設に様々なジャンルのアーティストを派遣

WORK.4 高校演劇部へ潜入

高校演劇というフォーマットにとらわれず、演劇の大切な部分である「そこにいる、という説得力」を伝えるためのワークを実施。

WORK.5 アシスタントである地元アーティストをWS講師に登用

子ども向けの夏休みワークショップ、主婦向けのダンス講座など、講師として活躍できる場所を提供。

総勢30名の春日井高校演劇部で3日間演劇ワークショップを行った

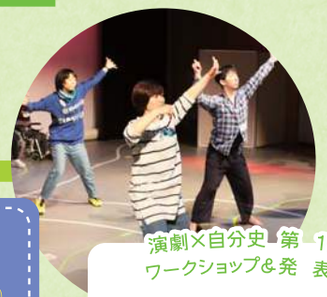
WORK.6 稽古場オープン！

演劇関係者だけでなく、福祉に携わる方、地元の高校生などが見学に。いろんな人を巻き込んでみる。

演劇×自分史のベース作り

「演劇×自分史」のポテンシャルに気付いた①

1. 実際の舞台上で、自身が自身のことを語るドキュメント的手法は、ありのままの参加者を見せることができる。
2. 参加者や観客から「他人の思い出に触発され、忘れていた記憶が蘇ったり、懐かしさを感じた」という声が聴こえてきた。自分史という読み物だけでなく、演劇を鑑賞することで、自分の人生を振り返るきっかけに十分に成り得る。



演劇×自分史 第1弾 ワークショップ&発表会

10〜70代の9名の参加者と8回のワークショップを経て、発表会を開催。市民から集めた春日井の地にまつわるエピソードや、市内を取材して得た地元ネタ、参加者自身の断片的な自分史をコラージュのようにつなぎ合わせ、笑いあり、涙ありの演劇作品を発表した。

2018.3.25上演『この場所、自分史』

演劇×自分史 第2弾 ワークショップ

1. より内容の濃い演劇創作に挑戦するために、ワークショップ回数を前年度の倍以上の全17回に。
2. 「演劇×自分史」のビジュアル化にもトライ。写真家・浅内政志さんに撮影を依頼。

VERSION UP!

バージョンアップする「演劇×自分史」！
参加者数は前年度の2倍の19人に！

モヤモヤの中から生まれたルール

RULE.1 既に書かれた自分史を演劇にしない

自分史には唯一「書いた本人がどう思ったか」という答えがあり、“私”という主役が存在する。「演劇×自分史」では、自分史の主役を他人に置き換えたりすることで、答えのない疑問をみんなで想像しながら、探っていくプログラムにしようと決めた。

RULE.2 みんなの話をみんなで聴く

身体を動かしたり台詞を言うトレーニングだけでなく、参加者の自分史（エピソード）を全員で聴く時間を設け、「聴く」姿勢を大切にした。

「自分史を使って遊ぶんじゃねえよ」って考えるとこまで遊べるって思う。人の人生が葛藤しています。あくまでも記憶をネタ」って思う、二人の自分にするのではなく、昇華したいので、「この記憶はどんな肌触り、温度なんだろう。触れないほうがいいのかな」と考えますし、本人とも話し合います。自分史にはトラウマに触れるという危うさもあるからこそ、見ている人に伝わる衝撃も強いと思うんです。

by 有門 正太郎

「演劇×自分史」のポテンシャルに気付いた②

1. 他人の話を聞くことで、その人の人生を共有し、感じる力が備わる。シンパシー（同情）ではなくエンパシー（共感）の力で、対話が生まれる。
2. 人生経験豊富な参加者には、若者にない深さと諦めと潔さがある。その姿をありのまま見せるだけで「演劇」になる。さらに若者と混じることで化学反応が起こる。
3. 演劇×自分史への参加を経て、「自分史を書いてみよう」とトライする人も。「書く」のはハードルが高いが、聞く⇒演じる体験を経れば、「書く」という選択肢が出てくるのかもしれない。

演劇×自分史 第2弾 公演
2019.2.10上演『旅旅（ふたたび）』

詳細は前項へ！

2018-

TO BE CONTINUED...

“あがり”のない「演劇×自分史」。
そこには、正解も答えもない。
だから楽しい！

2019年9月発行

WHAT IS ENGEKI×JIBUNSHI FOR YOU?

あなたにとって、演劇×自分史とは?

普段すれ違っただけの
あの人にも、100の物語が
あると感じさせるもの（観客）

他者の自分史で
自分の人生を
振り返る
きっかけ
（観客）

青春
七変化
（70代 参加者）

本当なのか？
演技なのか？
わからんことも
素晴らしい（観客）

地域
愛
（観客）

たくさんの
笑顔と（50代 参加者）
感謝の日々

春日井に住んで
いて良かったと
はじめて思えた
（観客）

忘れられない非日常な
人生振り返りの旅
（40代 参加者）

事実は小説
よりも奇なり（観客）

ジグソーパズルの
ピースが噴出
する瞬間（60代 参加者）

演劇が実は身近なもので
あるように、自分史も
身近なものだと感じる
（50代 参加者）

何もない普通の半世紀だった
でも私にとっては、子育ての全部が
自分史なのかなと感じられた（観客）

しんどいけど
挑戦できる
ことが楽しい
私にもできる
やってやる！
（70代 参加者）

他人事なのに
自分事に感じる
不思議な時間
（観客）

葛藤
（50代 参加者）

素敵じゃなくても
自分にも物語の（観客）
素材があると思える

演劇人がいくら
練習をしても
出せない
リアルがある（観客）

旅は道連れ
演劇は情け
（スタッフ）

終活のはじまり
（70代 参加者）

公益財団法人 かすがい市民文化財団
〒486-0844 愛知県春日井市鳥居松町5-44
TEL：0568-85-6868　www.kasugai-bunka.jp

助成
一般財団法人地域創造